
ありきたり原作ブレーカー

AS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありきたり原作ブレーカー

【Nコード】

N0226M

【作者名】

AS

【あらすじ】

一寸オタクなだけの極普通の中学生「東 拓実」。
まさに王道とばかりに神のミスで死んでしまい、これまた王道とばかりにチート能力付きでスパロボWの世界へ転生させて貰う。
しかもその時神にも等しい力を貰い、片っ端から原作を粉微塵にブレイクする！
・・・取り敢えず処女作ですので、駄作で何かと可笑しいところもあるかと思いますが、御容赦下さい。

プロローグ

(・・・一体、俺は何時まで自分の死体を眺めてなきやいけないんだ?)

トラックに轢かれ、グチャグチャになった自分の死体を呆然と見つめながら、止まっていた思考を

再開させる少年・・・もとい、この話の主人公の東あずま拓実たくみ。

(何か凄いデジャヴ感があるのは気のせいじゃないんだろうな・・・あのサイト小説を読むの転生物の小説の冒頭丸写しじゃねえのこれ?)

・・・作者として否定できない手抜き工事ではある。

(ええと、予想通りこっから転生ストーリー始まんなら直に神様が・・・っと、ご到着のようぞ)

目の前の空間に穴が開き、その中から非ツ常にイケメンなアジア系の男性が。

「初めまして・・・と言う事になるのかな? 私は、なりはアレだが、これでも神だ。

・・・ふむ? 君は、自分が死んだと言うのに何故そんなに平然としていられるのかね?」

「いや、ねえ? もうなんつーか、予想できてましたし? ああ、こっから出てくるかな、と」

「今いち意味が分からないが・・・っと、君は、東 拓実君であつてるかね？」

「Yes . I a m A z u m a T a k u m i」

「何故にそこ英語？・・・まあいい。で、本題なんだが・・・」ガバツ！

（あゝ、多分ここでお決まりのあれなのかな？）

「すまない！実はあの事故は「俺に関する何かで貴方がへマして手違いで死んだ？」そう！その通り・・・ってうん!？」

「あゝ、何故俺がそんな事知ってるかって？まあ、予想の範疇でしたからね。正直」

「・・・君は予知能力者か何かかね？」「違います」そうか・・・

「んで、態々こちらに出向いてくださったって事は、もしかして俺を転生でもさせてくれるんですかね？」

「・・・もう一度聞くが、君は予知能力者「じゃないです」・・・まあ、平たく言えばそうなるか」

「でも、勿論これはそちら側の業務上過失な訳ですから転生に関しての何らかの「代償」は払って頂けるんでしょうな？」

「ぬぐう・・・致し方あるまい。分かった、転生の際にこちらが出る事に関してはそちらの要望を聞く」

「（よし、成功！これでチート人間に成っちまえ！）それでは、まず俺が知っているアニメ、漫画、小説、ゲーム、その他諸々の技とか機械とかを
無制限で使えるように。後、出来る事なら不老不死。ま、詰まるところチート能力を」

「・・・なんと言おうか、君の知識だとチート通り越してるな。まあいい。その位簡単だ」

「それと、転生先を決めても良いですか？」

「良いだろう。で、何処にする？」

「そうですね・・・取り敢えず、スパロボWの世界へ」

「了解した。それでは、今から送るぞ。向こうで達者でな」

「はいホントに短い間ですけどお世話になりました（棒読み）」

ブツチン！

「・・・（こんの餓鬼やあ・・・散々言っついて最後はそれか・・・）
（それでは、いくぞ）」

ヒュン！

「・・・へ？もしや・・・」

チラッ（下を見る）

「・・・(ヤツチャッタ 足場がナクナツチャッタ)」

ビュオオオオ!!!

「コンチクシヨオオオオ!!!」

「神を愚弄するとどうなるか、身を持って知れこの身の程知らずめ
が」

取り敢えず続きます……………

主人公プロフィール（前書き）

いやはや、すっかり忘れておりましたプロフ。申し訳ありません。
と言つ訳で、軽く紹介していきます。

主人公プロフィール

〈主人公プロフィール〉

能力以外は転生前と変わりません

名前 東 拓実

年齢 16歳

体重 59kg

身長 178cm

性格 基本は礼儀正しく相手にも敬語を使う（ハイテンションの時は性格が変わる）。

年下、友達などには、その辺の中高生と変わらない喋り方（少々ジジ臭い）。

密かにSの気がある？が、無用な争いは好まない（逆に必要な争いなら幾らでもやる）。

やや臆病で子供が好き、そして優しいながらも相手の気持ちを考える事が苦手。

容姿 どこぞの黒の組織の如く、春夏秋冬どんな時、場所でも黒い長袖のTシャツに黒い長ズボン。

時によってはその上に黒いコートを羽織る。その為長時間夏に外に出ていると色々大変な事に

なってしまう。実は服に仕掛けがしてあり、自動温度調節機能でいつでも快適な温度になっている。

髪はこれまた黒色、瞳の色もまたまた黒色とまさに黒尽くめ。かなりのイケメン。

能力 森羅万象の物質、事象を自在に改変、操作出来る（某唯我独尊の団長の能力）。

容姿を自在に変えられる（某真庭忍軍の蝙蝠）。
身体能力の異常向上（某サイヤ人とか某スーパー配管工とかe t cの能力）。

不老不死。演算能力が異常に高い（某一方通行さんとか某超電磁砲とか機械とか）。

魔法関連の能力（魔力など）は最強、そして無尽蔵（なんかもう色々掛け合わせ）。

螺旋力が天元突破状態（螺旋王×シモンの自乗）。

宇宙空間、超高压力空間、その他諸々の空間でも普通に呼吸出来る。尚、全てにリミッターをかける事が出来る。

全て副作用無しです（螺旋力の暴走等）

2 因みにこれはホンの一部。実際は星の数より多いかも・・・

……………なんとも自分でもつくづくチートだと思います、ハイ。

ここまで来るとリミッター無しでは軽く各世界のラスボス倒せそうです……………それどころか世界、いや宇宙崩壊しそうです。

追記・・・これから当分生身での戦闘が少ないと思われるので搭乘機体の設定もここに書いておきます。

まず一機目。

機体名 ドルフィン号

全長 約37m

見た目 パーツが全部揃った「ピクミン」のドルフィン号。有事の際には操縦席の真後ろに主砲のノヴァブラスターが展開する。

搭載装備 ノヴァブラスター（元々搭載、星一つを碎ける程の威力の光線）。超AIを搭載しており、コンピュータに自我が存在する。尚、拓実の能力を発動するための「カギ」にもなっており、スパロボWの世界「では」ドルフィンが居なければまともに能力を使えない。（その為、リリカルなのはのデバイスの如く普段はイルカの形が彫られた腕輪となって拓実の腕にある）
尚、超AIは若干腹黒く、ノヴァブラスターぶっ放すのに快感を覚える少々アブナイ性格。

今後も何か変更があればこちらに加えていきます。

いきなり始まる原作ブレイク！（前書き）

どうも、ASです。

この度、作者の妄想の塊であるこの駄作を見て頂いて有難う御座います。

これからも、暖かい目で見てください。

それでは、第一話、スタートです。

いきなり始まる原作ブレイク！

拓実 side

あゝ、なんでこうなったのかね？うん、神様怒らしたからっつゝのはわかる。

でもねえ・・・だからってねえ・・・いきなりねえ・・・

宇宙空間に放り出すこた無いでしょうに。ホント。

・・・うん、取り敢えずスマブラの影響で宇宙空間でも平気みたいね。

さてと、あつちに見えんのが地球・・・成る程、いつか誰かが言っていた「地球は青かった」。

いまならその気持ちが痛いほど分かる。そんぐらい綺麗だわ。

とと、感慨にふけってる場合じゃない。ふむ・・・出来ることならアーデイガン一家と

合流したいがさてははどうしたもんか・・・あ！こつこつ時こそせこ技（と書いてチートと読む）だ！

ええと、どら モンの尋ね人 テツキに確率変動掛けて・・・完成！百分当たる尋ね人 テツキ！

原作やと七割の確率的中やったっけ？まあいいや・・・ブレスフィールド・アーデイガン。

少年の名は、デュオ・マックスウェル、もう一人は、カトル・ラバ
ーバ・ウィナー。

かの「革命戦争」の影の立役者と言われる五機のガンダムのパイロ
ットのうちの二人である。

「ったくよ…。いくら用意していたシャトルがトラブったからって
…トレイラーに地球までの
搬送を依頼することになるとはな…」

「トレイラーと言えば、宇宙を活動領域にする運び屋の事だよな。
デュオは詳しいみたいだね？」

「まあな。俺が所属していたスイーパーチームも、何度かやりあっ
たことがあるからな。

あいつらのやり口はイヤって言うほど見てきたさ」

「やり口…?」

「ああ、そうだ。連中が運び屋だったのは宇宙開拓時代の話さ。今
じゃ、通商船からの略奪、軍物資の横流し、法外な通行税の徴収が
連中のメインの仕事さ…トレイラーなんていう大層な呼び名はやめ
て宇宙海賊と名乗るのがお似合いだぜ…」

「このコロニー、ビットも正規の航海図には乗ってないしね…」

「連中が隠れ家を持ってると噂は聞いてたがな。俺も見るのは初
めてだ。プリペンダーの司令だからってレディ・アンもよく知って
たもんだぜ」

レディ・アンは、革命戦争において地球とコロニーの架け橋となっ

た『聖女』。現在は、デユオらが所属する『プリペンダー』と呼ばれる組織の司令を務めている。

実は、レディ・アンがビットを知っているのにはとある事情があったりする。が、それはまた別の（というか後の）話。

「でも、そんな人達をレディさんが紹介するなんて…」

「非常時だからな。プリペンダーも迎えをよこす余裕はないってことだろうさ。」

それに、蛇の道はへびってやつだ。極秘任務である以上、正規のルートは使えないしな」

「うん…。でも、僕達はこの情報を絶対に本部に持ち帰らなきゃならない…」

「まあ、足さえ確保できればその後はその後だ…連中がおかしな動きを見せればこっちもそれなりの対応に出るだけだぜ」

「それなりの対応って…」

「俗に言うスペースジャックだ。悪党相手に遠慮はいらねえさ」

「…わかった。取り敢えず油断はしないようにしよう…そろそろ迎えが来る時刻だ」

「リムジンとは言わないがそれなりには快適な旅を頼むぜ。ヴァルストークファミリーさんよ…」

少年達しかいないドッグに、声が消えていく。

………一体どんなチートなんですか？」

『それはこちらの台詞です。「森羅万象の〜」の能力なんて神ですよ神。何を想像したんですか？転生の時？』

「あ、口に出てた？で、何を想像したかって？え〜と、確か某右手袋と左手袋」

二次創作の小説見過ぎたかな・・・？

『はあ………もういいです。取り敢えず、どうやってヴァルストーク一家と合流しますか？』

「そうさねえ…取り敢えず直進してきたけど、ビットらしきコロコロもないしね…あ、そうだ！螺旋界認識転移システム！」

あれならヴァルストーク思いながらやりや行けんでしょ？

『了解。…というか、最初からそうすれば良かったですね？』

「全くもってその通り。一寸はしゃぎすぎたかな？ハハハh』!？緊急回避プログラム作動！」ハアアアアアア!？」

ギョオウン!

ズガガガガン！

ゴギユン！

「イダツ！？く、首があああ！？つてか、何事！？」

『恐らく宇宙海賊の襲撃かと！』

「M A Z I D E S U K A ! ? 」

「つちい！外したか！」

なんか物騒な事抜かしてやがる下品な声が聞こえてきたッ！？」

「誰が下品だゴルアアアアア！！！」

「ヤベツ！口に出てた！？ドルフィン君、L e t · s e s c a p e ! ? 」

『了解！エンジン臨界！飛ばしますよ！』

ギユオオオオオン！キユン！

「！？ちよ、タンマ、Gが、負荷が凄い！リバースする、ちよ、ま
七七（以下規制）」

『我慢して下さい！』

ゴオオオオオオオオオオ！

『だが断る！！つか戦わせる！！』

「キャラ違う！？ああもう！一寸待って今なんか考えるから！」

ぼく、ぼく、ぼく、ぼく、ぼく、ぼく、チーン！

「んじゃあの機体に乗ってる人に気づかれないうちにプロテクションなりシールドなり貼ってその上非殺傷設定の最低の威力！これ以上無理！」

『（いよつしやああ！）了解！ノヴァブラスター展開、エネルギー収束！同時に螺旋力シールドの形成！』

……一瞬本音が聞こえた気が……しかし、先輩とはAIの本性が月とスツポン……why？

『螺旋力シールド形成完了！ノヴァブラスターエネルギー収束完了！発射！』

キュン！

……え？発射の時の音そんだけ？

まいいや。取り敢えず……宇宙海賊の皆さん、ご愁傷様です。

「な、何だ！？あの光は！？」

「ヤバイ！何か知らんがあれはヤバイ！逃げるオオ！？」

今の人は中々勘が良い。そりゃ星一つ軽々木端微塵に出来ますから。

『（ツチ。このヘタレが…）了解しました。ノヴァブラスターのシステムを凍結します』

「ライー寸待て。今何か聞き捨てならん言葉が聞こえたぞライー!？」

『気のせいです。で、生存者の回収はどうしますか?』

「（コイツ平然と流しやがった…）うん…取り敢えず格納庫にでも放り込んでいて」

『了解。トラクタービーム放射』

ヒュオオオオオン…

『…回収完了。外傷は見受けられませんが、念の為に軽く検査しておきます』

「おお、済まんね。何かあったら報告お願い」

『はい。…ところで、肝心のヴァル家との合流なんですが…』

…すっかり忘れてたネー。

「うん、取り敢えず螺旋界認し」いえ、そういう意味ではなく…
き…って、へ?」

『私たちの直上にいます』

宙海賊が来ると聞いて臨戦態勢を取っていたが・・・

「……………」

先程のノヴァブラスターを見て絶句していた。

「……なあ、親父。これは夢なのか？それとも現実なのか？」

聞くのは冒頭で航海日誌を書いていたヴァル家長男にしてヴァルストークのブラックボックスから作られた人型機動兵器ヴァルホークを操るカズマ。

「……………カズマ、現実を見る。だが、俺もはつきり言って信じられん。幾ら量産型の機体と言っても、唯の砲撃で、完全に消滅する筈がない」

ヴァルストーク艦長、一部からは鷹の目と呼ばれ畏怖される男、ブレスフィールド・アーディガンはそれに我が目を疑いながら答える。

「…何なの、あの機体…」

半分不安、半分恐怖で眩くのは、ヴァル家三女でヴァルホークのオペレーターを担当するミヒロ・アーディガン。

「ヴァルホーク並みの大きさである威力の攻撃…」

ブレスフィールドブレスに漢として惚れ、何時の間にやら一家の仲間入りしていた、ヴァルストークの操舵を担当する青年、ホリス・ホライ

『拓実さん、何時までその情けない格好を晒す積もりですか？』

「……うるへえよ。あれだけ必死で逃げながら探してたのにこれだよ？

Orz

…って成るでしょ普通」

そんな風になるのはお前だけだ拓実よ。

『一回病院行つてきて下さい「んだとゴラアアア！」…ふう。

拓実さん、通信システム復帰しました

同時にヴァルストークのシホミ・アーディガンから連絡が入ってきています』

「へ？マジ？うんじゃすぐ繋いでくれ」

『了解。通信回線開きます』

ブン！

サウンドオンリーです。

【そちらの機体、聞こえますか？】

「はい、聞こえます」

【こちらは武装輸送艦ヴァルストークの通信担当、シホミ・アーデ

イガンです。

そちらの所属する団体、個人名、及び機体名を言って頂けますか】

「あゝ、了解しました。私は…（こつちだと名前が逆か…）タクミ・アズマと言います。

私はどこの団体にも所属していません。機体名はドルフィンです」

【…分かりました。それではアズマさん、こちらに着艦して頂けますか？】

「…何故ですか？」

【先程の砲撃に関して出来ることなら教えて貰いたいのですが…】

「……逃げても追いつかれるでしょうね…分かりました、そちらに行きましょう」

【有難う御座います。では、誘導しますので…】

「ああ、別に構いません。直接そちらに向かうんで…（ドルフィン、腕輪になって螺旋界認識転移システム作って自分の中に組み込んでブリッジに転移）」

【は？】

『了解…作成完了。座標指定。システム作動』

シュン！

【……………え？】

次に続きます。

いきなり始まる原作ブレイク！（後書き）

・・・はい、すみませんでした。本当に色々。

変なところで区切って投稿したり、投稿後無茶苦茶改訂したり・・・
こんな非常識な書き方ですみません。本当に。

読者の皆様、今後とも、このダメ作者と駄作を応援してくださいれば
有難い限りです。

ご都合主義、俗に言う厨二病臭い？のはスルーして下さい・・・

ついでに言っておけば、追いかけている時にすぐにシステムが
復帰しなかったのはパニック状態だったからです。
とある科学の超電磁砲レールガンの超能力と同じ原理です。

次回、「え？何？今度は虫退治？」お楽しみに。

7月某日、大幅な改訂。

業務連絡……

え、知っている方の方が少ないと思われるダメ作者です。

わずかにいらっしやるこの小説をお気に入り登録されている方、とんでもない長期間小説ほったらかししていた事、非常に申し訳ありません。

この度、この小説を一旦……どうも特別な理由がないかぎりには消してはいけないようなので……放り出して、再構成して書き直そうかとおもっています。

そうしたところでどのみち更新の速度は可笑しいままですが、それでも一旦区切ってケジメにしようかと思えます。

それでは失礼致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0226m/>

ありきたり原作ブレイカー

2011年10月7日08時11分発行